

言葉を学ぶとき、人は必ず「夢」 を持っている

教務部長 古谷修一



すでに20年近くも前になるが、在外研究でオランダのユトレヒト市に1年間滞在したことがある。在留手続のために Bureau New-Comers という機関を訪ねた際、冒頭に「あなたには、オランダ語を無料で学ぶ権利がある」と伝えられ、驚かされた。私の研究分野は国際刑事法で、国連がオランダに設置した旧ユーゴ国際刑事裁判所の研究をするための滞在である。裁判所は英語・フランス語が使用言語、受け入れ先のユトレヒト大学の研究所でも英語だけで仕事は十分にできる。オランダの社会や文化に関心があって滞在しているわけではないから、それまでオランダ語を学んだことはなかったし、滞在中に学ぶ必要もないと考えていた。

「オランダ語を学ぶつもりはありません」と答える私。驚いた様子で「なぜですか?」と尋ねる面接の担当者。私は事情を丁寧に説明するが、それでもオランダ語を学んだ方がよいとしきりに言われ、根負けした私は結局オランダ語のクラスに通うことになった。

授業に行ってみると、なぜ「無料で学ぶ権利がある」と言われたのかが分かった。このオランダ語クラスは、移民としてオランダに定住することを希望する人々が、オランダ社会に溶け込むことを支援するために設置されていたのである。受講者の国籍や背景は千差万別だが、その多くが北アフリカや中東地域の出身者である。彼らと席を並べて、まさしくオランダ語のABCから学んだ。お世辞にも語学学習者として優秀とは言えないが、その真剣さと熱心さには驚いた。休み時間に片言の英語やフランス語で同じクラスの人たちと話をすると、誰もがオランダ語を学んで、家族と共にこの国で幸せに暮らすのだという希望に満ちていた。そして、教師の人たちもまた、彼らの希望を叶える重要な仕事をしているという誇りを持っていた。おそらく日常の生活問題まで相談されることが多いだろうと思われたが、彼ら・彼女らが実に献身的に、そしてプロ意識をもって受講生に接していることにも大いに感銘を受けた。

約2か月間の入門オランダ語のクラスが終わったところで、研究活動が忙しくなり、上級のクラスを受講することは断念したが、私にとって、この機会は語学学習の意味を考え直す良い機会となった。

外国語を学ぶとき、人は必ず「夢」を持っている。語学学習そのものが好きという人もいないわけではないが、多くの人は、何かの目的・目標に向かって語学を学び始めるものである。私自身を振り返っても、将来は国際紛争の解決に貢献できるような仕事がしたいという夢をもって、英語の勉強に励んできた。決して楽ではない語学学習の毎日を支えるのは、そうした将来への「希望」「夢」である。そして、語学を教える教員は、こうした学生の夢の実現を支えるサポーターであるとも言える。

早稲田大学が掲げる中長期計画「Waseda Vision 150」は、2032年までに海外からの留学生を1万人にすることを目標としている。現時点でも4千人以上いる留学生は、年々増えてゆくことになるだろう。その一人ひとりが、異なる目的、希望、夢を抱いて早稲田にやって来て、日本語を学ぶことになる。日本の社会や文化などを学習するため、高度な日本語を駆使できる能力を身につけたいと希望する学生もいれば、英語の授業を中心とする英語学位プログラムで学びながら、日常生活や日本人との交流を深めるために日本語の勉強を始める学生もいるだろう。日本語学習の必要性やその優先順位は異なるとしても、いずれも夢や希望を胸いっぱい抱えた学生たちであることは間違いない。日本語の学習は、彼ら・彼女らにとって「夢」への第一歩であり、日本語教育研究センターの教員・スタッフはそれを支えるという重要な仕事を担われている。

更に言えば、留学生の夢を支えるという使命は、「留学生1万人の早稲田」に働くすべての教職員が常に意識すべきことでもあるだろう。ただ単に数のうえで1万人を達成することではなく、1万人一人ひとりの夢の実現に貢献する WASEDA となること。それができてはじめて、「早稲田で学べて本当に良かった」と評価されることになると思っている。

そうした意味で、日本語教育の専門家集団としてセンターで働く方々の知見や経験は、今後全学の教職員が共有すべき財産であるとも言える。それを日々最前線で開発し発展させている日本語教育研究センターの皆さんに最大限の敬意を表するとともに、「夢と希望を支える機関」として、センターの活動がさらに充実・発展することを期待したい。

(ふるや しゅういち、早稲田大学法文学術院)